

研究助成 報告書

一般財団法人新潟県建設技術センター理事長 殿

令和 5 年 3 月 14 日

所 属 名 てらどまり若者会議～波音～
代表申請者名 木村 勝一

貴センターの研究助成事業について、下記のとおり報告いたします。

記

1. 助成の報告概要 : 別紙 様式 2 のとおり

事業の内容

申請者名（所属/代表者名）	てらどまり若者会議～波音～ 代表 木村勝一
申請事業名	寺泊港の未活用地を活かした水辺の広場創生に関する事業」

1. 背景や必要性

（申請事業の目的、必要性を、その地域の課題等との関連を明らかにして、具体的に記載して下さい。）

《寺泊地域の課題》

寺泊地域は、古くは北前船の寄港地として海上交通の要所となって発展し、また佐渡への流刑を待つ順徳天皇や日蓮聖人など数々の偉人が残した歴史も深い地域である。バブル期には魚の市場通りを中心に観光でも発展したが、近年では地域産業の衰退から年間2～3%の人口減少が続いている。寺泊港近郊での漁獲高は減少し、魚の市場通りの周辺を中心とした観光業も衰退の一途をたどり、2019年には歴史的にも縁が深く50年余り続いてきた佐渡汽船赤泊定期航路の廃止が決定した。寺泊地域では、衰退の一途を止めるべく、まちづくり活動が行われている部分もあるが、これまでは長岡市合併以前の行政頼りのまちづくりが根強く、官民連携や住民が主体的となったまちづくりがなされていなかった。

《寺泊港の現状》

寺泊は海の街として知られるが、地域住民、特に子ども達の実離れが近年顕著になっている。要因として、寺泊地域内の海で安全に子ども達が遊べる場所は限られており、かつ町の中心部から離れていることが挙げられる。寺泊港は町の中央に立地し、港内には防波堤に囲まれた安全な水辺が存在するが、地域からの認知度は低く、放置ボートが多数置かれているモラルのない荒れた状況で、港湾を管理する行政機関にとっても悩みの種となっている。

※下記地図参照(事業該当エリアは緑で囲んだ円状の部分)



2. 事業の内容

(1) クリーンアップ&海の体験アクティビティ体験

①寺泊港内を利用した海を体感し、SDGsを楽しく学び、キャンプ体験もできるイベント

寺泊港の未利用地である緑地帯でクリーン活動を行った後に、寺泊水族博物館協力のもと水生生物探索会を実施。水生生物の下敷きを制作するために捕まえた魚の写真を撮影した。改めて寺泊港にいる水生生物の多様性を感じることができ、普段海に親しみが薄い親子に海の豊かさを体感してもらえうイベントになった。

また今年度は水生生物探索のほかに、キャプテンスタッグ株式会社の協力のもと、カヌーSUPのマリンアクティビティの体験や実際に親子で火起こしなどを行うキャンプ体験も実施。寺泊中央海水浴場では無許可でキャンプをしている観光客もいるが、寺泊にはキャンプ場がないため、寺泊港の新しい可能性を見つけることができた。

寺泊水族博物館や寺泊漁業協同組合、寺泊マリーナは昨年度同様に連携したが、地元企業や県内企業、ほかにも行政関係者など寺泊港で活動が続けてきたので新しい団体と協働関係を築くことができた。

日 時	2022 年 7 月 9 日（土）9:00 – 15:00
場 所	寺泊港
参加人数	55 人（うちスタッフ 8 人）
協力団体	キャプテンスタッグ株式会社、寺泊水族博物館、寺泊漁業協同組合、金八の湯、寺泊マリーナ、寺泊消防第一分団、長岡市役所商工部バイオエコノミー担当課
内 容	・クリーン活動 ・水生生物探索会 ・マリンアクティビティ ・キャンプ体験 ・地元消防団による消火体験活動 ・寺泊の海の幸でおもてなし



② 寺泊港緑地帯清掃

当団体に関わりをもってくれている人を中心に、地域住民に呼びかけて計4回清掃活動を実施。草刈り機などは当団体で持っていないので、地域の方からご協力いただいて活動することができた。自分たちの住んでいる、もしくは自分たちが関わっている場所は自分たちの手で維持していくというのを念頭に置いた活動を引き続き実施していく。

日 時 : 6月1日(水)10:00-13:00、9月15日(木)8:00-10:00、10月22日(土)10:00-13:00
3月11日(土)10:00-12:00

場 所 : 寺泊港
参加人数 : 4回合計で18人(うちスタッフ 7人)



※以下は計画したが新型コロナウイルスや天候などの影響で中止となったもの

日 時	2022年8月中旬の土日
場 所	寺泊港
協力団体	寺泊釣船組合、美味美食探求の宿 住吉屋
内 容	大学生を対象に港のクリーン活動後に釣船体験と、その後釣った魚を利用したオリジナルの寺泊井 SNS 投票グランプリを企画。企画進行中に新型コロナウイルス流行感染期と重なり、関係者で協議し中止となった。

日 時	2022年10月22日～23日
場 所	寺泊港 緑地帯
協力団体	キャプテンスタッグ株式会社、寺泊水族博物館、寺泊漁業協同組合、金八の湯、寺泊マリーナ、寺泊消防第一分団
内 容	7月9日に開催した海の体験会が好評だったため、2回目を該当エリアでのキャンプ宿泊をして2日間での開催を行政許可も得て関係団体にも承諾済みであったが、悪天候のため開催困難と判断し、エリアのクリーン活動と草刈りのみ天候の合間をみて少人数で実施した。

(2) 広報活動

・寺泊の水生生物図鑑の作成

寺泊水族博物館と協力し、水族館の所有する寺泊の魚の写真に加えて当団体の活動を通しての写真を集めて編集。足りない写真は水族館主催の生物探索会にカメラマンを連れて参加し素材写真を集めた。その後、各魚種の特徴コメントを添えて最終的に両面の下敷きタイプの図鑑を作成。次年度以降の生物探索会に活用していく資料とする。

(表面)



(裏面)



・波音のホームページ作成 (<http://teradomari-hane.net/>)

今まではインターネット上での情報はfacebookを中心に発信していたが、ホームページやInstagramを新たに開設したことで、様々な層に情報を届けるような仕組み作り着手した。SNSはクローズな情報発信媒体のため、特にホームページを作成することで、インターネット上での情報発信の集約を図ることに取り組んでいる。初期構成は専門家に依頼することで、SEOやセキュリティ面も対策を講じたホームページとなっている。今後は団体で運用することで、自分たちの情報はもちろん、寺泊の魅力を発信できるようなプラットフォームづくりにも取り組んでいく。



(3) その他

①寺泊まちづくりに関する講演会と情報交換会

日時：2023年3月12日(日) 13:00-14:30 ※オンライン (Zoom) で開催

参加者：10名(波音メンバー5名、メンバー以外の関係者5名)

内容：2022年2月に寺泊でオープンした宿泊施設

「VILLA VOIX」の管理元である㈱寺泊BASEの代表より講演会を実施。寺泊の観光資源がもつ可能性をデータから説明いただき、同社の考えるまちづくりとその仕掛けを共有いただいた。波音のメンバーは勿論のこと、特にメンバー以外の関係者から講演会後のリアクションが良く、地域連携の大切さや他地域を巻き込んだ連携、学生などの若者を地域に入れる仕組み作りなどに興味を示す方が多かった。改めて、波音の活動理念を



思い出して再考していきたい。

②先進的事例の視察

1. 糸魚川市、および富山県 日時 2023年2月23～25日（視察者：木村勝一、木村栄子）

目的：港の利活用事例、富山の海岸線活用やまちづくり、アマモ育成の見学

内容

2月23日に寺泊を自家用車で出発し、糸魚川市の姫川港を見学した。新潟県内では珍しい港の近くに須沢キャンプ場というオートキャンプ場があるため、そこを中心に寺泊港の緑地帯の整備に関する展望を検討した。須沢キャンプ場自体は管理棟があり、とても綺麗に芝や水場も管理されており、ごみも全く落ちていなかった。ネット上の口コミでも管理人の方が厳しく管理されていることが分かるような口コミが散見された。（写真1～2）

2月24日は富山市内にある新湊マリーナ、海洋博物館として公開されている帆船海王丸周辺の港を見学した。新湊マリーナでは、マリーナの目の前に管理棟は全く別でレストランが運営されており、富山市内でも人気の飲食店と現地知人からの情報もあった。（写真3～4）海王丸周辺は大規模港の広大な土地を活かした公園や帆船見学用の遊歩道や休憩所が整備されていた。この日の夜は富山市内に在住する2世帯家族の家で懇親を行い、港近くに住む地域住民の生活感や海岸への意識など確認することができた。

2月25日は、魚津水族博物館を見学し、隣県ではネット検索する限り唯一のアマモの展示を観察した。展示されている水槽内のアマモやそこに居着く生物だけでなく、実際の海に生えているアマモの定点観察記録を動画で上映しており、よりアマモの役割や海の中での臨場感を感じた。水族館自体も創立110年程度経過しており現在の建物が3代目ということで、寺泊水族館の創立90年で3代目の建物と共に市営水族館で類似した環境であることが分かった。実際に、アマモに関しては魚津水族館は富山県立植物園と連携共同していることが分かったのも今後の方策として参考になった。（写真5～6）

写真1



写真2



写真3



写真4



写真5

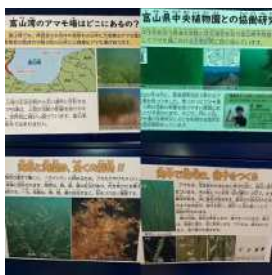


写真6



2. 佐渡市 日時 2023年3月5～7日（視察者：木村勝一、辰田覚）

目的：佐渡市内の各団体のまちづくり活動、アマモ再生、海洋資源活用の取り組みなどの視察

内容

3月5日～3月7日にかけてメンバー2名で新潟県の佐渡ヶ島へ視察を行った。視察を行うにあたり、佐渡の加茂湖でアマモ場再生事業を長年継続している佐渡島加茂湖水系再生研究所(カモケン)の方と連絡を取り合い、視察中のコーディネーター役を担っていただいた。

3月5日は両津港の道の駅あいぽーと佐渡を視察し、寺泊港内にある佐渡汽船発着所の類似条件での

港活用事例を見学した。島内ではあまり有効活用されていないと地域住民から意見あったが、私達から見るとロケーションも良く館内設備も整っているのも勿体ない印象があった。地域住民に利用されることで交流施設の魅力も増すと感じたので、寺泊港内整備時は提案していきたい。その後は、加茂湖で栽培が行われているカキ養殖施設のカキ小屋をリノベーションし6次化したカフェを見学。建物の外観はほぼカキ小屋のままだが内装は綺麗にリノベーションされており、カキ小屋の雰囲気を活かしながら加茂湖と周辺風景のロケーションを最大限に活かした店舗となっていた。(写真1)寺泊の漁師小屋にも活用できないか検討していきたい。そして、加茂湖で行われているアマモ再生の事業をカモケンの副代表豊田氏とメンバーの方々から現地同行のもとで解説いただいた。(写真2)加茂湖では2008年よりカモケンが結成されて10年以上に渡り湖水環境の保全活動に取り組まれており、その一環でアマモ場再生も取り組んでいる。アマモ場再生に関しては、加茂湖特有の環境と近年の環境変化の影響もあり上手くいっていないのが実情で、現在はヨシ原再生が主な活動となっているとのことだった。活動詳細は、事業連携している佐渡潜水の正司氏より解説いただいた。加茂湖のアマモは夏場の汽水湖特有の28度を超える高水温とその持続期間が長いことが原因で、昔よりアマモが生育しにくい状況にあるとのことだった。それに加え、近年は下水道や農地用水路の整備が進み、春先に加茂湖周辺からの田んぼからの多量の用水排出による水質環境悪化も一因となっている。寺泊周辺とは大きく水質や環境は異なるが、自然要件がアマモに及ぼす影響は甚大で、人的介入では改善困難なことが伺い知れた。それ故にカモケンでは様々な方法でアマモの定着を試行錯誤し、そのデータ収集をされているので情報共有し活用していきたい。

3月6日はカモケンの豊田氏に関わる「たまりば・子ども未来舎りぜむ」を見学させていただいた。(写真3)佐渡の潟上地区にある同施設は、(一社)潟上未来会議の板垣氏を中心に運営されており、地域の子供達の成長を見守る場として参考になった。同施設は日本財団の助成を受けてリノベーションで誕生した施設で、不登校児など学校にいけない子供達の居場所提供も行っており地域課題の向き合い方について施設利用者である子どもや地域住民を世代関係なく巻き込み、皆で考え行動されていることに感銘を受けた。団体を法人化する過程や地域の集う仕組み作りも学びになった。その後、大きく移動し、佐渡金山で近年話題の相川地区でまちづくりを実践している相川車座の岩崎氏より話を伺った。相川は金山バブルとも呼ぶべき状態で次々に新しい施設がオープンしており、佐渡市でも象徴的な存在となった北沢浮遊選鉱場を中心に、以前は見向きもされなかった地域の資源ヘスポットを当てて有効活用されていた。(写真4)また、この地域は外部資本もまちづくりに参入しており、公民連携の様相がよくわかる事例で民間の資本力をもって空き家や空き店舗対策にスピーディーに取り組まれていた。寺泊でも昨年より連携している新しい宿泊施設が外部資本として参入してきているが、いかに地域課題と企業ミッションをリンクして互いにwin-winになれる土台構築ができると事業が加速的に進む印象を受けた。

最終日の3月7日は、寺泊と佐渡を最短で結ぶ赤泊地区の視察を行った。4年前に訪れた時から大きな変化はなく、佐渡の中でも地域の温度差を感じるようになった。その中でも、元宿泊施設をリノベーションしたチョコレートショップ(写真5)は島内での勢いのある事業者と結びつきが強く、若い外からの移住者の影響力を感じる場所になっていた。やりたいことを実現する若者が1人2人と増えるほどに連鎖反応でそのような人材が集まる地域になることを今回の佐渡視察で感じ、寺泊地域にも実践者となるプレイヤーをもっと増やして繋がっていく活動を推進していきたい。

写真1



写真2



写真3



写真4

写真5



3. 事業効果

- ・寺泊＝海洋資源が、地域住民が集える、遊べる場所へと変わりつつある

2年間活動を継続させたことで、寺泊港の未利用地の活用方法を住民をはじめ、関係各所にも示すことができた。現に2022年9月には新潟県与板維持管理事務所からの依頼で、今後の港利用に関する意見交換会を実施する運びとなった。そのように当団体のような市民団体が、自らの手で未利用地を活用していくことで、寺泊にも集える場があるということ地域内外に再認識させることができた。今後も人が交流するような拠点となるように活動を継続させていく。

また、今年度は当団体としてアマモ場の再生事業は上手くいかなかったが、専門家からの支援不足や継続するための支援体制作りを見直して行政にも働きかけたことで、令和5年度は長岡市も環境衛生課でブルーカーボン事業に取り組みたいとのことで先行事例の我々を連携・支援したいと活動の輪が広がっている。

- ・協力、連携団体の増加

当団体は2017年の活動開始から5年経ち、地域内はもちろん、地域外からも一緒に活動したいと声をかけてもらうことが増えた。様々な協力者や団体がいなければ当該事業はもちろん、他の事業でもここまでの成果を上げることができず、活動の広がりを持たせることもできなかった。その形の一つに生き物図鑑の完成もあげることができる。私たちが今年度より活動のビジョンとして掲げている「寺泊に住む、関わることで豊かに生きる」を達成するためにも、今後も関係各所とは協働しながら事業を進めていく。

《今年度の事業を通じて新しく関わった団体、企業》

キャプテンスタッグ株式会社、金八の湯、寺泊消防第一分団、長岡市役所商工部バイオエコノミー担当課、長岡市役所環境衛生課、佐渡島加茂湖水系再生研究所、佐渡潜水株式会社、一般社団法人潟上未来会議、相川車座、株式会社寺泊BASE

4. 今後の取り組み

- ・海洋資源を活用した交流拠点づくり

今まで寺泊港にある未利用地の有効活用の可能性を探ってきたが、イベントを継続させていくことで徐々に関わる人や団体が増えてきたことで、興味関心が寺泊に向けさせることができていることを感じている。この広がりや可能性を一過性で終わらせることのないよう、自分たちのフィールドは自分たちで守り創っていくということを念頭に置き、子ども大人も寺泊の海に興味関心を持ってもらえるような水生生物探索会や自然体験のアクティビティ、キャンプ体験などの取り組みを継続させていく。

- ・交流促進と関係人口増加

近年寺泊では、VILLA VOIXをはじめとした宿泊施設やプライベートサウナ『ART』など様々なコンテンツができた。そのような寺泊の熱を冷まさないように当団体としても関係人口増加の一助となるように「てらどまりナイトマルシェ」を計画している。ほかにも当団体ではさまざまなプロジェクトを進めているが、私たちのように寺泊に関わることでやりたいことが実現できるというのをアピールし、寺泊に関心ある人を増やしていき、地域活性につなげていきたいと考えている。